

歴史は未来の羅針盤



このたび『近江日野の歴史』第五巻「文化財編」を刊行しました。文化財編は、第一章／美の香り、第二章／匠の文化、第三章／住の演出、第四章／地に根ざす、の四章です。今回からその内容について紹介していきます。

第一章第一節は「絵筆の美 絵画」と題して、日野町を代表する

「日野町の絵画」・「日野出身の画人たち」・「日野ゆかりの画人たち」の三つの項で構成されています。

第一項では、主に室町時代から江戸時代に制作された町内の寺院や地元で伝わる仏画や肖像画などを取り上げています。第二項では、高田敬輔と敬輔門下の画人の作品を、そして第三項では日野にゆかりのある画人たちの作品を紹介しています。

日野町の絵画を特徴づけるものとして、高田敬輔とその門人たちの作品があり、ここではそれらを中心に紹介します。

日野出身の画人 高田敬輔

町内出身の有名な画人として高田敬輔が挙げられます。江戸時代中期に活躍した敬輔は、もともと



▲高田敬輔像 (弟子の島崎雲圃作)

商いをなりわいとしていましたが、京狩野家に入門し画道に進みました。その後、華頂山(京都市)の義山から浄土宗の教えを学び、そこで絵を描く仕事に就き、画人として活躍していきます。

本項では、京狩野家に入門した直後とされる十八歳ごろの作品から晩年に至るまでのものが取り上げられています。これらの作品からは、敬輔の作風の特徴や変容が見られます。そのうち、日野の浄土宗の寺院には敬輔の作品が数多く伝わります。また、正明寺などの黄檗宗寺院にも敬輔の作品が残されています。このことから当時

敬輔が幅広い人脈をもっていたことがうかがえます。また、京狩野家のみならず、水墨画の大家でもある雪舟の影響を受けた作品もあります。

数多く残る敬輔作品のなかでも、彼の集大成ともいえるものが、高田家の菩薩寺でもある信楽院の天井画です。六面に分けられて描かれたこの大作は、ダイナミックな筆遣いで、敬輔画の特徴でもある雲煙模糊とした雲や群像が描かれています。特に、天井中央にある雲龍図は見るものを圧倒します。

受け継がれる

敬輔の画風

信楽院の天井画のほかに、敬輔の作品として特筆すべきものに、鮎画(香魚図)があります。鮎は敬輔から門弟たちへと描き継がれていった画題です。なかでも、敬輔門弟のひとり、下野国(栃木県)

茂木に出店を構えていた近江日野商人、島崎利兵衛家の三代目島崎雲圃や、雲圃の弟子である小泉斐は、敬輔のものを模範としつつも独自の画法をそれぞれ取り入れた作品を制作しています。

また、敬輔の直系の弟子である高田敬徳は敬輔の画風をよく受け

継ぎ、町内の寺院に屏風画や天井画を残しています。敬徳は敬輔の孫である高田一徳・谷田輔長の師でもあり、敬輔の画風を忠実に伝えた人物です。敬輔の画風は多くの門弟により踏襲もしくは発展され、日野のみならず関東地方へも伝えられました。



▲香魚図(高田敬輔作)